

## 国立民族学博物館の収蔵品③

# 乗り物からみる文化の継承——花嫁の輿



写真1 国立民族学博物館に展示されている花嫁の輿  
2014年 韓敏撮影



写真2 行列中の花嫁の輿  
2008年 安徽省宿州市 韓敏撮影



写真3 輿の職人、徐子松と後継者の息子  
2008年 安徽省宿州市 韓敏撮影

「輿」とは、人を乗せて肩で担いで歩く乗り物のことであり、紀元前から中国で天子や諸侯の乗り物として使われていたが、南宋の十二世紀あたりから、一般庶民の乗り物としても広く使用されるようになった。輿で花嫁を迎える漢族の風習も、このときから始まったとされている。十九世紀後半に人力車が登場するまで、輿は重要な運送手段として日常的に使用されていた。その中でも、とくに結婚式に輿は欠かせない道具であった。

中華人民共和国建国後の一九五〇～八〇年代、輿を使って花嫁を迎える風習は一時見られなくなり、そのかわりに馬車、自転車、車などの乗り物で花嫁を迎えていたが、二十世紀の九〇年代に入ると、花嫁の輿を使う伝統的な結婚式が北京、上海、遼寧、宿州、蘭州、昆明などの各地で徐々に復活してきた。

花嫁の輿には、担ぎ手の数が二人あるいは四人、八人の三種類がある。現在、国立民族学博物館中国地域の文化展示場に展示されているのは、四人で担ぐ中型のものである（写真1）。安徽省宿州市在住の

輿職人、徐子松（一九二四年生）が製作したもので、二〇〇八年に現地の結婚式で二回も使われていた（写真2）。七歳から師匠の父親に師事した彼は、二十代にやっと一人前の職人となり、初めて自分の鋸を持つようになった。現在、国营企業から転身してきた四十代の息子に輿作りの技術を伝授している（写真3）。自分たちの製作したこの花嫁の輿が海を渡って、日本国立民族学博物館で展示されていることを、徐さんとその家族は大変誇りに思っている。

中国の北方では花嫁の輿は、通常木でつくられるものが多いが、徐さんの輿は、運びやすいように南方から取り寄せた竹で作られている。輿の上の天蓋には、厄払いの鏡や不老長寿の仙人、歴史上の英雄（三国時代の劉備、諸葛孔明、関羽、張飛、趙雲、黄忠、宋代の穆桂英、楊宗保など）の張り子の人形が飾ってあり、天蓋の四隅には二対の大きな張り子の竜と鳳凰が立っている。中国では竜は恵みの雨を降らせると同時に洪水や干ばつを引き起こすとされて、威厳と力強さを象徴する想像上の動物であるのに対して、鳳は伝説上の美しい鳥とされ、

平和を象徴している。竜と鳳は一对として幸運や夫婦円満のシンボルとしてよく使われる。また、輿の周囲のガラス板の裏には、中国の四大美女（西施、王昭君、貂蝉、楊貴妃）の画像が施され、めでたくにぎやかな雰囲気を出している。

結婚式の当日に、輿の前を提灯と楽隊が先導する。楽隊はラッパ、チャルメラ、笙を吹いて、銅拍子をならす人々から構成されている。輿の後に嫁入り道具を入れた箱の行列がつづく。昔、行列の長さは花嫁の実家の身分と富の象徴であったが、いまは、輿の後ろにつづく車の台数および車のメーカーが、新郎新婦の社会的地位の象徴となっている。

輿で花嫁を迎える儀式は、伝統があり、華やかで車より費用が安く、環境にもやさしいため、中国の各地で静かなブームとなっている。花嫁の輿の展示品を通して、中国の歴史と庶民の暮らしに触れ、グローバルな時代における伝統文化の継承の課題を考えるきっかけとなることを願っている。

（韓敏）